FIND　OUT

綺翠色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＩＮＤ　ＯＵＴ

【Ｎコード】
Ｎ０９８３Ｎ

【作者名】
綺翠色

【あらすじ】
――――大切な人と交わした忘れられない約束
あの時から始まった運命の物語――――

ごくごく普通の女子高生
に訪れた厄災・・・
その身に宿る力を知らされ
命を狙われる事となった
播磨　瑠菱は、異能力を持つ少年「燐」と出会う――――。

抗えない運命の歯車が、
誘う先は“光”か“闇”か・・・。
（※第参話更新しました・挿絵も追加しました）

プロローグ（前書き）

※文才ないんで；；；
スイマセン＞（｜　｜；）＜
よろしかったら見て下さい（土下座）

プロローグ

＞i13661―1656＜

―――深々と雪が降る。

その中に一人、少年が立っていた。

雪は少年の足首の方まで積もっているが、そんな事は気にも留めず、静かに空を見上げている。

すると、少年は何かを想い出したように、ふと、口を開いた。

「師匠、これで・・・オレの罪が消えるワケじゃないけど、せめて、今度こそは護り貫きたい」

そう言うと、少年は自分の手元に視線を移した。

少年の手には、刀が握られている。

「“約束”は必ず守るから・・・・・」

呟く少年の背中は、少し寂しそうだった。

まるで、何か大切なモノを取り零してしまったような―――・・・

第壱話　encounter―出会い―（前書き）

必ず彼らは出会うだろう――――――
偶然のようで必然な
運命の糸に導かれて・・・

第壱話　encounter―出会い―

外は雨が降っている。
雨のせいか、時間のせいか、外は真っ暗だ。
しきりに降り注ぐ雨の中を一台のバスが走っている。
―――今日はずいぶん遅くなってしまったなぁ・・・
そのバスの中で、播磨（はりま）　瑠菱（るい）はボーっと外を眺めていた。
バスは公園の前を通りかかった。
「ん？」
公園の様子がおかしい。
樹木の間から覗く、淡い青い光。
目を凝らすと、何かが燃えているようだ。
「・・・・え？」
青い光の正体は、“青い焔”だった。
―――人が・・・・燃えてる！？
瑠菱はその異様な光景に釘付けになっている。
＞i13662―1656＜
炎に囲まれて、少年が一人立っている。
その容姿から、歳は瑠菱と同じくらいだろう。
すると少年がこちらを向いた。
一瞬、瑠菱と少年の目が合った。
白銀色の髪に紅い眼、子供とは思えないような鋭い眼差しだが、どこか悲しげな雰囲気を纏っていた。
そんな少年の周りを囲む炎は、
熱くて冷たくて
激しくて静かで
残酷で優しげな
そんな“青い焔”だった―――・・

◇

―翌日―

春も真っ只中、桜の花も満開だ。

瑠菱は眠い目をこすりながら、学校に続く通学路を歩いていた。

すると突然、背中を押された。

瑠菱は、よろめきながらも後ろを振り向くと、青年が一人立っていた。

「もぉー、上総(かずさ)先輩！やめて下さいよー」

“上総先輩”と呼ばれた男が笑う。

もう暖かくなりつつあるというのに、上総の首にはマフラーが巻かれている。

「だって、おもろいねんもん」

「面白くないですっ！やめて下さい！」

そう言って、少し怒った風にしてみるが、上総は尚も笑っている。

上総は、瑠菱の部活の先輩で、二ヶ月前に引っ越してきたばかりである。

勉強もスポーツもでき、いつも笑顔を絶やさない事で有名？だ。

噂では、けっこうモテるとか・・・。

ケラケラと笑う上総を放置し、瑠菱は先に歩き出した。

「おーい、播磨。そっちは学校やないぞ。」

学校とは逆の方に向かっている瑠菱に、上総が呼びかける。

その声に、瑠菱は振り返り、答える。

「知ってますよー」

「どこいくねん」

「・・・殺人現場です」

そう言って、瑠菱は再び歩き出した。

遠くなっていく背中を、上総は静かに見送った。

◇

公園の前には、たくさん人だかりが出来ていた。
――すごいヤジ馬の数・・・
――やっぱり、昨夜(ゆうべ)のあれは幻なんかじゃなかったんだ
――犯人は、もう捕まったのかな？
瑠菱は昨夜(ゆうべ)の少年を思い出す。
――・・・あの犯人らしき人物・・・・、私と同じくらいの歳に見えたけど・・・
その時、驚きの一言が聞こえた。
「よかったわねぇ、ただのボヤで」
――えっ！？
「誰一人ケガもせずすんだのが幸いね」
「でも怖いわ・・・・。一ヶ月前には、この公園でホームレスが殺されたばかりなのに・・・・」
「犯人もまだ捕まってないしねぇ」
――どういう事！？
瑠菱が周りにいた人に聞く。
「ボヤ・・・・ではないですよね！？殺人事件じゃ！？」
いきなり聞かれた人は、驚きながらも答えた。
「えっ？警察が調べてボヤだって・・・・・」
――そんな・・・・
「ちょっと通して下さい！！」
瑠菱は、ヤジ馬を掻き分けて公園の中に入った。

――死体どころか、血痕ひとつない！？
そこには、コゲ跡と煙が少し昇っているだけだ。
昨夜の光景と重なる――。
――・・・だって昨日は確かに・・・

「どういう事ですか！？」
そのままでは納得出来ず、その場にいた警官に歩み寄る。
「私は確かに見ました・・・たくさんの死体！！燃える青い炎！！犯人は男です。私と同じ歳くらいで、制服らしきものを着ていました！！」
瑠菱が必死に説明するも、警官は優しく微笑んで答えた。
「お嬢さん・・・、今回のは間違いなくボヤだよ。安心して」
もう一人の警官が代わって説明する。
「この公園は前々から不良の溜まり場になってるし、一ヶ月前にホームレス殺人も起こってるから、警察も注意して調べてるよ」
――そんな・・・、確かにこの眼で見たのに！？
「殺人があった証拠なんて一つもなかった」
――・・・・なんで――・・

◇

キーンコーンカーンコーン・・
朝はたくさんの生徒が登校してきている。
「はぁ・・・・」
瑠菱はため息をつきながらも、トボトボと教室に向かっていた。
すると、
「瑠菱ー！」
と、向こうから女子が一人が走ってきた。
「・・・愛生（あい）」
「おはよー」
愛生が笑顔で、瑠菱に挨拶した。
「・・ぉはょぅ・・・・」
瑠菱は、元気のない声で挨拶を返した。
「どーしたの？そのローテンション・・・」
「まぁ・・・、ちょっとね・・・・」

「「？」」
そんな事をはなしているうちに、教室に着いた。
「何があったか知らないけどっ、元気だしなよ！せっかく、今日は面白い事があるのに」
何故か、愛生のテンションが異様に高い。
「面白い事・・・？」
その時、教室のドアが開いた。
担任の女教師（せんせい）が入ってきた。
「さぁ、みんな！席に着いてー！！」
ざわめく教室に、先生の声が響く。
「どうぞ、入って」
「キタ☆」
愛生が瑠菱に囁く。
「はい・・・」
先生に促され、一人の男子が入ってきた。転校生のようだ。
――――愛生が言ってた“面白い事”って、転校生（コレ）の事？
瑠菱は、さほど興味もなさそうに頬杖をついて見ている。
転校生が教卓の前まで来て、自己紹介をする。
「白銀（しろがね）　燐（りん）です。よろしくお願いします」
お決まりの言葉を述べる転校生だが、表情には何の色も出ていない。
まさに、無表情という言葉がふさわしい表情だ。
もうだいぶ暖かくなってきているというのに、転校生は制服のシャツの上から、薄手のフード付きのコートを羽織っている。

＞ｉ１６７６２―１６５６＜

瑠菱は、そんな転校生を見て目を見開いた。
――――え・・・
思わず、手に持っていた教科書を落としてしまう。
転校生から目を逸らして、下を向いた。

そんな事には気付かず、先生が説明を始めた。
「白銀君は、海外で会社を経営されているお父さんの都合で、入学が一ヶ月ほど遅れました。今日から同じクラスメイトです。わからないことなど教えてあげてね」

「なんか！！思ったよりイイ男じゃん」
愛生がはしゃいでいる。
教室もざわめきはじめた。
「・・・・瑠菱？」
瑠菱の異変に気がついた愛生が名前を呼ぶが、瑠菱の耳には届いていないようだ。
―――間違いない。昨夜の男だ！！
昨夜の光景が、瑠菱の脳裏をよぎる。
それは、間違いなくあの少年だった。
―――なんでだ！？どういう事だ！？
―――・・・・なぜ、こいつがここに！？
―――・・・・やっぱり、昨夜のは見間違いなんかじゃ・・・・

スッ

瑠菱の目の前に、先ほど落とした教科書が差し出された。転校生、もとい燐だった。
「落ちてましたよ？」
燐は、さっきと同じ無表情だ。
瑠菱は睨むように燐を見た。
二人の間に沈黙が続く。
「・・・・何？何？あの二人見つめ合っちゃってるけど・・・・！？」
「え？どうしちゃったの、播磨さん・・・・」
教室がざわつく。
「・・・・ありがとう・・・・」

瑠菱が、やっと教科書を受け取った。
「どういたしまして」
まさに棒読みという言葉がピッタリな喋り方だ。
「・・・」
瑠菱は、相変わらずムスッとしていた。

―昼食の時間―
生徒達が自由に話している。
「遅れてやってきた新入生、白銀　燐か――」
男子達は燐に興味深々で、早速、質問攻めにされている。

「なんかさー、ドラマみたいだねっ」
「今までいろんな国にいたらしくて、何ヶ国語もペラペラらしいよ」
「さっすが愛生、情報通！！」
瑠菱と一緒に昼食を食べている女子三人は、燐の話で盛り上がっている。
「でも、なんか白銀君って不思議だよね」
「うんうん。白髪に紅目って・・・・」
「ハーフかなんかなんじゃない？」
「肌も白いしね」
「イヤリングとかつけてるし」
「ホントだ。でも、あんなにアクセ付けてて大丈夫なの？」
「さぁ？先生達も何も言ってないみたいだし、特別待遇とか？」
ちなみに、アクセサリー等を付けていてもこの程度で済むのは、ここの学校の規則が軽いせいもあるが、もともとある程度の私服は可の学校だから、というのもある。
しかし、完全に私服で通っている者はあまり居ない。

その頃、瑠菱は・・・
――――絶対アイツがあの時の犯人に違いないんだ・・・・

まだ、あの事件の事を考えていた。
――――それにしても・・・アイツ・・・・
「――・・・・い・・・・・・・瑠萎！」
「！！」
自分の名前を呼ぶ声に、はっと我に返る。
「どーしたの？ボーっとして・・・・。瑠萎、今日なんか変だよ？大丈夫？」
「ははっ、大丈夫大丈夫！」
苦笑いになりながらも答える。
瑠萎はサッと片付けをして、どこかへ行ってしまった。
「・・・・変なの」
愛生がボソリと呟く。
その一連の様子を、燐は遠くから視線だけを移して見ていた。

◇

学校も終わり、瑠萎はあの事件があった公園に来ていた。
――――犯人は現場に戻るという・・・・。ここで奴を張ってみるか
瑠萎は近くにあったベンチに腰掛けた。
――――それにしても、証拠が一つもないってどういう事なんだろう
――――そして、あの青い炎はなんだったんだろ？青い炎は赤い炎よりも高温で、ガスや化学物質でも使わない限り、あそこまでハッキリと出ないんじゃなかったっけ？
瑠萎は、周りの音も聞こえないほど考え込んでいる。

「背中がガラ空き」
「！！！」
突然、背後で呟かれた声に振り返る。
そこには燐が立っていた。
「うわっ！？ちょ・・・普通に出てこれないの！？」

「驚きすぎ」
「誰のせいよ」
瑠菱はふてくされたように言う。
「・・・・隣、いいか？」
そう言う燐からは表情も変わらないが、声音からも考えていることが全くと言っていいほど解らない。
「・・・う、うん」
隣にいる不思議な少年に、瑠菱は未だに警戒しているようだ。
「・・・ていうか、敬語使わないの？」
「めんどくさい」
「最初、使ってたじゃん」
「最初はな」
「・・・・・・・・」
――――い、息苦しい～ッ・・・
全く弾まない会話に、瑠菱は苦笑いになるのだった。

「「・・・」」
少しの間沈黙があったが、瑠菱の方から切り出した。
「なぁ、お前は知っているか？一ヶ月前、ここでホームレスが殺された事」
「聞いた事ぐらいは、ある・・・」
興味があるのかないのか解らないような返事を返す燐。
それでも、瑠菱は続けて話をする。
「顔がわからなくなるまでボコボコに殴られて、無数の刺し傷があったそうだ。最期は、下半身に生きたまま火をつけられたらしい。犯人もまだわかっていない」
燐は黙って聞いている。
「それでも最初の頃は、凄惨な事件として話題になり、すぐに犯人は捕まるだろうと思われていたけど・・・。結局は、次々と起こる凶悪事件に流されるように、いつの間にか忘れられ始めている・・

・・」
瑠菱は少し俯いている。
「あのホームレスは、誰にも知られずに生きて、誰にも知られずに死んでいった。そして、もう誰もあの事件をを思い出す人もいなくなってしまうんだ・・・」
そこで、今まで黙って聞いていた燐が口を開いた。
「・・・・お前は忘れなきゃいい」
「えっ？」
「世の中のみんなが忘れても、お前は覚えていればいい・・・。オレは忘れない。どんな事でもずっと・・・」
そう言った燐の眼差しは、寂しそうに、どこか遠くを見つめていた。
「そ・・・そうか・・・・」
――――不思議な事を言う奴だ・・・

燐が、ふと立ち上がって歩き出す。
「それに、そんな連中にこの国の法律は必要ない」
「え！？」
燐が階段の上で立ち止まった。
「そう・・・、本当に悪い奴には――・・」
瑠菱からは、逆光で燐の顔は見えない。
「Ｉｔ ｊｕｄｇｅｓ ｂｙ ｔｈｅ ｌａｗ ｔｈａｔ ｃａｎｎｏｔ ｂｅ ｊｕｄｇｅｄ ｂｙ ｔｈｅ ｌａｗ・・・・」
燐がふと呟く。
瑠菱が、日光に眩しそうに顔をしかめる。
「？なにを・・・言って・・・・」
「・・・・何でもない。早く捕まるといいな、犯人」
「うん」
言って、瑠菱は微かに笑みを浮かべた。
「やっと、笑った」
「え？」

「全然笑ってなかったからな」
「あ・・・あぁ。・・・・ちょっと考え事してて・・・」
瑠菱は少し気まずくなったのか、黙り込んでしまう。
そんな瑠菱の心境を知ってか知らずか、燐の方から別れを告げる。
「・・・それじゃあ、また明日。学校で・・・・」
「あぁ」
――――悪い奴じゃなさそうだけど。
――――・・・・でも何か、大切な事をわすれているような・・・・。
なんだったかなぁ・・・
本命を忘れている瑠菱でした。

二人が別れた頃には、太陽がもう沈みかけていた――――・・

◇

――キーンコーンカーンコーン・・
夕方の学校に、授業終了のチャイムが鳴り響く。
生徒達が帰っていく中、携帯の音が小さく鳴った。
――・・ルル・・プルルルル・・ピッ
「・・・・何だ。・・・・ああ、わかってる。アイツらは今日片付ける。手筈を整えとけ」
電話の持ち主は、影を纏うような雰囲気で淡々と話す。
『・・・りょーかい。・・・・で、女はどうするつもりや？見た所、問題ないように思うけど？』
比べて、電話の相手は比較的明るい話し方だ。
「・・・・別に、どうもこうもねぇよ。今まで通り消すだけだ」

◇

日も沈んで、辺りは闇に包まれつつあった。

瑠菱は、またあの公園に来ていた。
――あんな事言われると、なんか来ないといけない気がするんだよね・・・
瑠菱はそんな事を考えながら、昨日の燐の言葉を思い出す。

――――――
「・・・・お前は忘れなきゃいい」
「えっ？」
「世の中のみんなが忘れても、お前は覚えていればいい・・・。オレは忘れない。どんな事でもずっと・・・」
そう言った燐の眼差しは、寂しそうに、どこか遠くを見つめていた。
「そ・・・そうか・・・・」
――――――

「・・・・忘れなきゃいい、か。・・・私だって、忘れたくない・・・けど・・・・」
瑠菱が悲しそうに呟く。
「記憶は新しく塗り替えられていくんだ」
そう言って、ほんのりと闇に染まっていく空を見上げた。
「せめて、いつか記憶が塗り替えられて忘れてしまう・・・その時までは・・・・」

「その時が“今”だとしてもか？」
「！！？」
背後からいきなり聞こえた声に、瑠菱が振り返る。
同時に急に雲行きが怪しくなり、公園の街灯が消える。

一瞬の闇に閉ざされたが、その闇は青い光によって破られる。
瑠菱の視界が再び開ける。
その目に映ったものは――――・・
自分を取り囲むように燃え盛る“青い焔”と
日本刀の切っ先を向けている、白狐(びゃっこ)の面を被った少年だった。

「・・な・・・・ぁ・・・・・」
眼前に広がる奇妙な光景に、瑠菱は静かに震える。
助けを呼びたくても、声が出ない。

「動くなよ」
少年は冷たく告げる。
その声に比例するように、炎が一際(いっそう)大きくなる。
「しっかり目に焼き付けておくんだな。この最後の光景を――――――・・」

―ＥＮＤ―

第弐話　ｃｏｇｗｈｅｅｌ―動き出す歯車―（前書き）

さぁ、始めようか――――――・・

第弐話　ｃｏｇｗｈｅｅｌ―動き出す歯車―

＞ｉ１６７５８―１６５６＜

――――――――――「しっかり目に焼き付けておくんだな。この最後の光景を・・」

そう告げた少年の声は冷たく、身体の奥底まで突き刺さるようだった。

少年が手に握った日本刀を振り上げる。

瑠菱は、もう何も考えることができず、今の状況に目をつぶった。

そして、少年は振り上げた刀を、瑠菱めがけて勢いよく振り下ろした――――――――――――――

「――――――・・・・・・？」

いつまで経っても届かない刃（やいば）に、瑠菱は目を開いた。

そこには、先程まで自分の周りで燃え盛っていた“青い焔”と少年が持っていた日本刀が、何事も無かったかのように消えていた。

ただ一つ変わらないのは、座り込んでしまった瑠菱を見下ろしている白狐（びゃっこ）の面を被った少年だけだ。

「・・・どういう・・こと？」

瑠菱は、未（いま）だおさまらない震えを堪（こら）えて、声を振り絞った。

「・・・・・やっぱりか・・」

しばらく黙っていた少年が口を開いた。

「・・・・え？え？」
瑠菱は、どんどん変わる状況についていけていないようだ。

――――――――「・・・お、間に合ったみたいやな」
緊迫した空気が張り詰める場に合わない声が聞こえた。
瑠菱と少年が声のした方に振り向いた。
「先輩！？」
瑠菱が驚きの声をあげる。
「よォ」
瑠菱に呼ばれた上総（かずさ）は、いつもの笑顔で返事をすると、座っている瑠菱に手を貸した。
瑠菱は、上総の手を借りて立ち上がると、状況が掴めないという顔で上総と少年の顔を交互に見た。
「・・・え？何？どうゆうこと？」
「まあまあ、詳しい話は後や。それより、燐。もう面取ってもええんちゃう？」
「・・・・そうだな」
上総に促（うなが）され、少年は白狐の面を取った。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！やっぱり！」
面を取った少年の顔を見るなり、叫び声をあげる瑠菱。
「やっぱり！アンタ、白銀（しろがね）　燐（りん）じゃん！！さっきの炎！やっぱり犯人は白銀・・・」
「うるさい」
大きな声で喋りながら詰め寄ってくる瑠菱を、燐の冷めた声が制した。
「詳しい話は後だと言っただろ」
「能力（ちから）も解ったし、とりあえず行こか」
「能力って何！？行くってどこに！？」
瑠菱は何も知らされないまま、連れ去られるようにして、どこかに連れて行かれた。

◇

強制連行され、どれくらい経っただろうか・・・
三人は人気(ひとけ)の少ない通りに来ていた。
それまで、全く速度を緩めず歩いていた燐と上総が、急に立ち止まった。
「？」
それにつられて瑠菱も歩みを止める。
すると、燐と上総が小さな声で話し出した。
「やっぱり最初に処分しとくべきだったか・・・？」
「ま、えぇんちゃう？どっちにしろ結果は変わらへんのやから」
「？？」
瑠菱に、燐と上総の話している内容(ごと)は聞こえていないようだ。
「そろそろ出てきたらどうや？」
上総が、何も居ないはずの物陰に呼びかける。
すると、その物陰の周りからゾロゾロと不良のような人影が出てきた。
ざっと二十人くらいだ。
その中から、列を割って大柄な男が出てきた。どうやら、隊長格のようだ。
「お前達の後を付けさせてもらった。その女をわたしてもらおうか」
そう言って、大柄な男は瑠菱を指差した。
「え！？」
衝撃の言葉に、瑠菱は驚きの声をあげる。
「そんな事できるかよ」
「その為に、ワシらが付けられたんやしな」
燐と上総が、瑠菱を庇うように一歩前に出る。

「やはり簡単にはいかぬか・・・。いくぞ！」
大柄な男がそう叫ぶと、いっせいに向かってきた。
それを合図に、燐が地面に両手をつける。
すると、そこからあの“青い焔”が広がり、地を這って、向かってくる男達を足止めした。
その隙に、上総が足元の小石を拾い上げた。
すると、その小石が黒く光って形を変え、一瞬で拳銃に変わった。
男達が燐の焔で足止めをくらっているうちに、上総が拳銃で次々に男達を貫いていく。
一瞬の出来事だった。
男達が襲い掛かってきてから、たった数秒で、しかもたった二人の手によって、二十人あまりいた集団は一人残らず地面に突っ伏したのだった。
その驚異の光景に、瑠菱は呆然とするしかなかった。
「えらそーな口叩いとったくせに、あっさり負けとるで。ブザマやのォ」
上総が、地面に突っ伏した男達を見て楽しそうに笑う。
「いいから早く行くぞ」
燐は相変わらずの無表情のまま上総を促す。
「なんや、せっかちやのォ。そんなに急がへんでも大丈夫やって」
そう言って、上総は無邪気に笑う。
一方、燐はそんな上総を見て少し呆れたような表情をした。
「・・・えっと・・・」
そこまで、黙りこくっていた瑠菱が口を開いた。
「どうなってんの？・・・コレ」
「あ～、スマンスマン。驚かせてしもうたか」
上総は優しく笑いながら、戸惑っている瑠菱の頭をポンポンと撫でた。
「ちょっ、先輩！？」
「ほな、行こか」

言うと、上総は歩きだした。
「え！？」
戸惑って立ち止まっている瑠菱を、上総が急(せ)かす。
「はよ知りたいんやろ？ほな、はよ行くで」
「はぁ・・・」
上総の言葉に促され、しぶしぶ歩きだした。
――てか、この人達はこのままでいいの？
瑠菱はそんな事を思いながら、地面に突っ伏したまま、ピクリとも動かない男達に目を向ける。
――死んではないみたいだけど・・・・
「おーい、はよ来いよー」
瑠菱から数メートル離れた所から、上総が呼ぶ。
「はーい」
瑠菱は返事をすると、上総のいる所まで駆けていこうとした――――
その時、
「危ない！」
突然かけられたその言葉に、瑠菱が反射的に振り返る。
そこには、自分に襲い掛かろうとする男の姿があった。
――！！
しかし、その男は瑠菱の隣を駆け抜けた影によって、再び地面の上に倒されることとなった。
「大丈夫か？」
燐は、男が起き上がらないのを確認すると、瑠菱の方を向いて尋ねる。
「・・・・殺したの？」
瑠菱は、燐の持っている日本刀を見ている。
「いや、背打(みね)ちだ」
そう言って、燐は刀を鞘に納めた。
すると、刀は青い焔に包まれて消えた。

二人の間に張り詰めた空気が流れる。
「はいは～い」
しかし、その空気は、二人の間に割り込んできた上総によって破られた。
「さ、また襲ってこんうちにはよ行こか～」
そう言って、二人の肩を半ば強引に引っ張って、木々の陰の中に消えていった。

「え？」
瑠菱はその場所で、疑問の声をあげていた。
「・・・ここ？」
「せや」
疑問を投げかける瑠菱に、上総はさも当たり前のように答える。
「・・・ここって、神社？ですよね？」
「せやけど？」
「・・・・・・・・・・・・なんで、神社なんですか？」
「なんでって言われても・・・なぁ？」
自分にされた質問を燐に投げかける。
「知らねーよ。そんなこと」
燐は、無表情だ呆れたように答える。
「だ、そうや」
笑顔で振り返る上総に、苦笑する瑠菱だった。
「ま、行けばわかるわ」

そう言って、瑠菱の肩をポンポンと叩いた。
「行くって、神社(これ)の中にですか？」
「地下いくねん」
上総に促され、瑠菱は神社の襖(ふすま)を開けた。
そこには、古びた一室があった。
「別に、普通じゃないんですか？」
「いや、地下あんねん。ほら、ここや」
そう言って上総が指差した先を見ると、人一人が立てるくらいの板が床の上に被せてある。
その板を、燐が乱暴に足で蹴り上げると、その下には地下につながるらしい階段があった。
三人はその中に入っていった。

「中は結構広いんだね」
降りた先にあったのは、扉が一つあるだけのシンプルな部屋だった。
「ここですか？」
瑠菱は上総にまたもや疑問を投げかける。
「いや、この先や」
上総は笑顔で答えると、扉に手をかけた。
その扉を開けた先に広がったのは、けっこうな広さの廊下が続く景色だった。
床はフローリングで、明るさはほの暗いといった感じだ。
何本か分かれ道はあるが、それも廊下が続いているだけで部屋などはない。
「・・・なに、ここ・・・」
驚いたように呟く瑠菱に、上総が言う。
「ま、ここでたむろってもしゃあないし、とりあえず“支部長”んとこ行こか～」

上総が、通路の奥を指差して言う。
“支部長”・・・？」
上総の言葉を聞いて、瑠菱は頭を傾げた。
「・・・会えば解るよ。全部・・・」
燐が瑠菱の隣で静かに呟いた。

――――――「・・・ほら、着いたで」
三人は不思議な装飾をされた扉の前に来ていた。
「遠かったね・・・」
瑠菱が少し疲れたように呟いた。
「まぁな。今回だけは、こっち通らなアカンかったし・・・。次からは、普通に入れるんやし、今回だけは堪忍な」
そう言って、上総は無邪気に笑った。
それに対して、燐は、
「次があれば、の話だけどな」
と、無表情で呟いた。
「え？ちょっと、何それ・・・。なんか怖いよ？」
瑠菱は、苦い顔になって言う。
無表情・無感情の声音で言われると尚更怖いセリフだった。

「――――支部長、入るでー」
上総は言って、扉をノックし開けた。
扉の先に居たのは、自分達と同じか、少し上くらいの歳の少年と、その側近らしい青年だった。

少年は、社長椅子に足を組んで座り、ニヤニヤと笑っている。
「支部長、連れてきたぞ。・・・コイツでいいんだろ？」
そう言って、燐は瑠菱を前に突き出した。
「そうそう！ご苦労だったな！皆の諸君」
少年は深く頷くと、瑠菱の方に近づいてきた。
「ど、どーも・・・」
瑠菱は苦笑いになって少年の顔を見た。
少年も興味深そうに顎に手を当てて瑠菱を見つめている。
「・・・・悠幹（ゆうき）、播磨さんが困っているじゃないですか」
瑠菱に詰め寄る少年を側近の青年が止めに入った。
少年が元の位置に戻ると、側近の青年が話し出した。
「先程は急に手荒な事してしまって申し訳ありません。私どもも急ぎの用だったもので・・・」
側近の青年は、瑠菱に深く頭をさげながら丁寧に謝った。
「い、いやいや！そんな・・・大丈夫・・・・では、あんまりなかったけれど・・・・」
瑠菱はあたふたしながら青年に答える。
青年は頭を上げると、本題を切り出した。
「すいません。・・・では、まずは私達の簡単な紹介を・・・・」
青年はそう言って、少年を振り返った。
少年は言葉無しに頷き、口を開いた。
「俺は、中央（ここ）支部の支部長、兼、総合統率部長をやってる神尊（こうそ）　悠（ゆ）幹（うき）だ。そして、こっちが、俺様の忠実なしもべ・・・」
「側近の御守（みもり）　護（まもる）です」
護が悠幹の言葉に重なるように、自己紹介した。
悠幹は、護を睨んでいたが、気づかないフリをしていた。
すると、護が瑠菱の耳元で囁いた。
「・・・・悠幹は、一人称がおかしな奴で、性格上イライラするときもあるかと思いますが、悪い奴ではないので、よろしくお願いします」

「・・・は、はぁ」
その様子を見た悠幹は指さして、
「おい、そこ！なにコソコソ話してんだ！？」
と、盛大に怒鳴った。
「うっさいわ、支部長。いちいち怒鳴んなや」
そう言った上総は、楽しんでいるようだった。
「てめッ・・・、上司に対してなんだ！その口の利き方は！」
「せやかて、上司らしィないもん」
上総はからかうように言った。
「なんだとー！」
悠幹が掴みかかろうとするのを、上総は身軽に避ける。
「・・・・あの・・・・」
見るに耐えかねた瑠菱が、隣の護に話しかける。
「止めなくていいんですか？」
護は当たり前の光景をみるように、二人のケンカを眺めている。
「いいんです。こういうの止めるのは私の仕事ではありませんから」
護は、そう言って燐の方に視線を移した。
瑠菱もつられて燐の方に視線をめぐらせる。
ちょうどその時、燐が口を開いた。
いつものトーン、いつもの表情で、ただ一言だけ、
「・・・・うるさい」
燐の冷えきった声が、二人の熱を鎮めた。

燐のおかげ？で二人はすっかり大人しくなり、最初の位置に戻っていた。
「そんじゃ、本題をはじめるか！」
悠幹の言葉に、瑠菱は、やっとか、と半ば呆れつつも黙っておくことにした。

「教えてやるよ。俺達がアンタを此処に連れてきた理由、アンタが現(いま)在置かれてる立場を、な」

END

第弐話　ｃｏｇｗｈｅｅｌ―動き出す歯車―（後書き）

――次回――

瑠菱の身に迫る危機――――――

知らされる理由（わけ）

「大切なモノがあるなら・・・・、護りたいモノがあるなら

それを見失わないことだ・・・」

白銀達の正体とは――――――！？

――

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます！

こんな作品を読んでくださって・・・うぅ（ＴＯＴ）・・ぐすっ・・・

ぐすっ（＜．＞）・・・うっ・・・ゲホゲホ（。д。）

ありがとうございます！（真）

更新遅くなったりするときもありますが、

これからもどうか宜しくお願い致します。

敬具

第参話　ｒｅａｓｏｎ―理由―（前書き）

―繰り返す出会いは悲しみの輪廻―

第参話　reason―理由―

＞i21115―1656＜

――――――――――「教えてやるよ。俺達がアンタを此処に連れてきた理由、アンタが現在置かれてる立場を、な」
そう言って悠幹は、隣に立っている護に話すように促した。
「え～、それではですね、まず私達の事からお話しましょうか。その前に、これからは話す事は他言無用でお願いします」
護は一つ咳払いをして、話し出した。
「単刀直入に言いますと、私達は政府直属の特殊治安維持部隊、いわば国を守るヒーローといったところでしょうか」
“特殊治安維持部隊”と聞いて、瑠菱は絶句している。
「東西南北四つの支部と中央支部からなる組織で、主にその周辺の地域で活動しています」
そこまで聞いた悠幹は、ダルそうに肘をついた姿勢で口を開いた。
「ンな大したモンじゃねーよ。俺らなんて、政府の裏の顔をごまかす為の壁でしかないんだから」
「こらこら。一応でも総合責任者がそんなこと言うもんじゃないですよ」
「・・・おい、ちょっと待て。今、“一応”って・・・・」
そんな悠幹を華麗にスルーし、
「はいはい。それでですね・・・」
と、話を進める。
悠幹は、今回はしぶしぶながらも、突っ掛からずに黙った。
「あなたも、もうご覧になったと思いますが、私達は常人ではないような特殊能力を使うことができます」
「あぁ、そういえば・・・・」
瑠菱は顎に手を当てて思い出す仕草をする。

「では、一番気になっていると思います、あなたの事についてお教えしますね。悠幹が」
「俺かよ！？」
急に話が回され、面倒くさそうに頭を掻きながら、しぶしぶ向き直った。
「お願いします」
瑠菱は、自分の事となり、緊張と不安で表情が強張ってしまう。
「・・えっとだなぁ、まあ単純に言うとー、お前にも俺らと同じように“異能力”があるんだよ！」
悠幹は、瑠菱を指差して言い放ったが、沈黙の後、隣の護に向いて
「・・・あれ？なんか、いけなかった？」
と、真面目に聞く悠幹に対して、護は呆れた様子で答える。
「いきなりそんな事言って、飲み込めるワケないでしょう？本当にあなたは・・・・馬鹿」
「ばっ・・・」
悠幹は何か言おうと口を動かしていたが、咳払いをして瑠菱に向き直った。
「うん。まあ・・・そういうことだよ！」
悠幹は、照れを隠すように頭を掻く。
「全然、わかんないんですけど・・・」
「うーん・・・、まあ、簡単に言うとだな！お前は俺達の異能を“無効化”することができンだよ」
――そういえば・・・
瑠菱は、燐に襲われた時の事を思い出した。
――・・そういえば、あの時も白銀の異能を消したっけ・・・・
「その能力のせいで、お前はある組織に狙われてて、お前がその組織に渡ると面倒な事になるんで、先にこっちが保護したってワケ。で、そいつらが護衛ね」
言って、燐と上総を指さす。
「護衛？」

瑠菱は、イマイチよく解らない、といった感じだ。
「此処に来る途中で襲ってきた奴らがいたろ？まあ、アイツらなんかは下っ端だけどな。最近、アイツらの動きが激しくなってきてな。そうだなー・・」
悠幹は、そこまで話して思い出す仕草をする。
「大きめの事件となると、この間の『ホームレス虐殺事件』とかか？」
「あ！それなら知ってます」
瑠菱は、さっき燐に話したばかりだと思い出す。
「お、知ってたか。で、今度はお前がアイツらのターゲットってワケだ」
悠幹は腕を組んで頷く。
「・・・・それで？」
瑠菱は、まだ解らないようだ。
「で、って・・・まだ解んない？鈍いねー」
悠幹は、やれやれと首を振る。
「つまり！お前は今から俺らの仲間になるわけだよ」
「はあ。・・・って、えぇぇぇぇぇ！？」
瑠菱は驚きのあまり叫んでしまう。
「あ。やっぱ解ってなかったんだ」
悠幹は馬鹿にしたように呟いた。
「そんな！いきなり連れて来て“仲間になれ”だなんて・・・」
「あぁ、言っとくけど・・」
悠幹が瑠菱の話を遮る。
「お前に断る権利はないからな。これは、政府（くに）が決めた事。お前が断る事も、俺らがどうにかする事もできない」
言い切られて、呆然とする瑠菱に悠幹が付け足す。
「まあ、仲間になれだなんて言っても、今のままなら、普段通り暮らしてたらいいからな？こっちで勝手に護らせてもらうし」
「そんな事言われても・・・」

瑠菱は、まだ納得できていないようだ。
「お前を狙ってる組織を壊すまでの付き合いだよ」
悠幹に言われて、瑠菱は黙りこくってしまった。何も解らない世界に放り込まれて、不安になったのだ。
それからは、時間も遅いということで一旦、家に帰ることになった。

◇

真っ暗な空に星がいくつか輝いている。
時間は七時ほどになっていたが、街灯や店の灯りも多く、それほど道は暗くはなかった。
そんな中を、瑠菱は付き添いについてきた燐と二人で家路についていた。
「・・・・ねぇ」
沈黙に耐えかねた瑠菱が燐に話しかける。
「先輩は？」
「あぁ、上総なら次の仕事の打ち合わせに行った」
燐は相変わらずのポーカーフェイスで答える。
「仕事？高校生なのに？」
瑠菱は素朴な疑問を口にする。
「言ったろ？オレ達は政府の組織。高校生やってるのも、仕事なんだよ」
「え？じゃあ、普段は何してんの？」
何も考えず聞いてくる瑠菱に、燐は半ば呆れたように答える。
「それは、今はまだ教えられない」
「なにそれ・・・」
――・・なんでだろう？
――最初に会った時もそうだった。白銀（コイツ）といる時に感じるこの感覚・

・・・。
瑠菱がぼーっとしていると、燐が声をかける。
「・・・おい」
その声にぱっと振り向くと、燐が怪訝(けげん)な表情で瑠菱の顔を覗き込んできた。
「どうした？ぼーっとして・・・。疲れたか？」
「えっ・・・、いや、ちょっと考え事してて・・・・」
瑠菱は顔を背けて答える。
「・・うん。これから、どうなるのかなぁ、って」
言って、瑠菱は空を見上げた。
街の中心部から少し離れたのだろう。人工の灯り少なくなった夜空には、星が綺麗にかがやいている。
「今はまだ、私だけの問題で済んでいるけど、もっと大変な事態になったら、私のせいでたくさんの人達が巻き込まれるんじゃないかって・・・・」
――・・・家族、友達、それに・・・・
瑠菱の頭にたくさんの顔が浮かび上がる。
「それに・・・、もし、相手が只者じゃなかったら、アンタ達だって危ないかもしれないのに」
「・・・そうだな」
燐は、あえて軽く答える。
「だったら・・・・」
瑠菱が立ち止まる。それにつられて、燐も立ち止まった。
「だったら、なんでこんな仕事請けたの！？」
瑠菱は顔を上げ、真っ直ぐ燐を見据えて言い放った。
二人の間に沈黙が流れる。
冷たい夜風が、二人の頬を撫でる。
「・・・言ったろ？これは政(くに)府の意思。オレ達に断る権利はない」
「・・・・っ」
「それに、これはオレの意思でもある」

そう言って、燐は顔を逸らす。
「え・・・？」
「ある人との約束と・・・オレ自身、もう大切な“光”を見失わない為の仕事なんだよ」
二人の間を冷たい風が駆け抜けた。
燐が振り返る。
「お前にも、大切なモノがあるなら・・・、護りたいモノがあるなら、それを見失わないことだ・・・」
そう言った、燐の表情は少し悲しそうに見えた。
「え、どうゆう意味・・・？」
「今は解らなくてもいい。ただ忘れるな。全て終わった後じゃ・・・遅いから・・・・」
「・・・燐・・・」
瑠菱は、ますます解らなくなる一方だった。

◇

その後、燐と別れた瑠菱は寝床についた。
――今日は色んな事があって疲れちゃった
瑠菱は今日一日を振り返りながら、溜め息をついた。
――明日起きたら、全部夢でした、ってなってたら、どれだけ嬉しいだろうか・・・
そんな事を考えながら、瑠菱は眠りについた。

――これは・・・・、夢？
瑠菱はふわふわとした空間の中にいた。
真っ白だった空間に、景色が現れる。
瑠菱は見たことのない景色だったが、どこか懐かしい。
その景色の中で、一人の少女が座り込んで泣いている。外見からし

て、六歳前後ほどの少女。
どうやらケガをしているようだ。
――夢？・・・だよね。でも、夢にしては妙にリアルな・・・・
頬を掠める風や、運ばれてきた匂いさえ感じ取ることができる。
その時、泣いていた少女が顔を上げた。
瑠菱は、その少女の顔を見て目を丸くする。
――・・・え？ウソ・・・・私！？
その少女は、幼い頃の瑠菱にそっくりだった。
瑠菱が驚いていると、少女に同い年くらいの少年が近寄ってきた。
「どうした？また、ケガしたのか？るい」
少年の言葉を聞いて、ますます驚く瑠菱。
少年の問いに、少女が小さく頷く。
少年は少女の頭を撫でると、同じ目線の高さまでしゃがんで、心配そうに顔を覗き込む。
「まったく・・・・、るいはドジだなぁ」
憎まれ口を叩きながらも、優しく微笑みかける少年。
それにつられて、少女もなんとか笑う。
――聞き間違いなんかじゃない。同じ名前だし、やっぱり私なのかな？それに、あの少年は・・・もしかして・・・・
少年の顔は髪に隠れていてよく見えないが、その髪は燐と同じ白銀色だ。
――・・・燐？・・・・でも、アイツとは初対面のハズだ・・・
夢にしても、よく出来過ぎている光景に、疑問を抱く瑠菱。
「しょうがないなぁ。また、オレがなおしてやるよ」
少年の言葉を聞いた少女の顔が、パッと明るくなる。
「ほら、ケガしたとこ出しな」
すると、少女は右足の膝を少年に見せる。
血は出ているが、少し擦り剥いたくらいのケガだった。
「たいしたことないな。よかった」
少女のケガの具合を見て、少年は表情を和らげる。

そして、ケガをしている部分を両手で覆うと、何か念じるような素振りをすると手を離した。
すると、何事もなかったかのようにケガは跡形もなく消えていた。
「・・・よし、できたぞ」
少年は一瞬、少し苦しそうな顔をしたが、すぐに笑ってみせる。
少女も「ありがとう！」と言って、笑顔を返す。
「たてるか？」
少年が先に立ち上がって、手を差し出す。その手を取って、少女も立ち上がる。
「うん！だいじょうぶ。やっぱり〇〇はすごいね！」
――・・・え？
「ねぇ、〇〇。また、ケガしちゃったらなおしてくれる？」
「あぁ。るいのためなら、どんなケガだってなおしてやるよ」
少年は笑顔で返すが、真剣な顔になって付け足す。
「でも、あんまりケガしないように、きをつけろよ。いたいのはイヤだろ？」
「・・・う、・・・・きをつけます・・・」
少年の言葉に、少女は気まずそうに答える。
――やっぱり・・・・。なんで、あの男の子の名前だけ出ないんだろう？
会話の中でも、少年の名前が出るときだけ、音がすっぽりと抜け落ちてしまったような感覚だった。
多くの疑問をのこしたまま、夢はここで終わった。
景色が消え、まるで、“これ以上は見せられない”とでも言うかのように、瑠菱の意識は再び暗闇の中に戻される。
瑠菱はそのまま、まどろみの中に身を委ねた。

◇

―深夜二時―

とあるビルの屋上から、街中を眺める二つの人影がある。
「燐！そろそろ時間やで～」
「わかってる」
二つの人影――――――燐と上総は、ビルの屋上で“あるもの”を待っていた。
「・・・・・来た」
上総が言うと同時に、燐と上総の周りに影が集まり始めた。
影は立体的に浮かび上がり、数秒で何体かの、生き物のような姿を形作る。
それを確認すると、燐は青い焔を出して日本刀に、上総は足元に転がっていた石を拾って銃に形を変えて構える。
「なんで、こんな雑魚(ざこ)どもをワシらが相手せなアカンのや。しかも、こんな夜中に」
上総は、敵を目の前にしてダルそうに欠伸をしている。
「仕方ないだろ。最近、無駄に増えてきてるしな」
一方、燐はいつもの無表情で淡々と喋る。
二人の目の前にいる敵については、二ヶ月ほど前まで遡(さかのぼ)る。
というのは、二ヶ月ほど前、突如現れて活動を始めたのだ。
最初の方は、大して害もなく密かに活動していただけだった。
しかし、最近になって活動が激しくなり勢力が増したのだ。
一般人が襲われるという報告もあり、燐達の組織が動いた次第である。
が、実際、異能力者の手にかかれば、そこまで強くもなく、“雑魚(ざこ)”という名で通っているのだった。
「ま、やるしかあらへんけどな」
そう言った上総の言葉を皮切りに、影達が一斉に二人に襲い掛かってきた。
たった数分で敵を殲滅すると、影達は塵のように融(と)けて霧散した。

「やっぱ雑魚やったな。はよ帰って寝よ」
上総が欠伸をしながら呟く。
しかし、燐は敵が消えても尚(なお)、張り詰めた空気を纏(まと)っている。
「・・・燐？」
その様子に気付いた上総が声をかけるが、燐は黙って夜空を見上げている。
「おーい、燐。どしたんやー？」
上総が二度目の声をかける。
そこで、燐が口を開いた。
「・・・・まだ、いる」
そう言った声の中には、少し緊張が混じっているように思える。
「へ？いるって何が？」
燐は何かの気配を感じ取っているようだが、上総は気付いていないようだ。
「気配を感じる・・・。しかも、さっきとは比べ物にならないくらいの・・・・・」
燐が言い終わる前に、風が吹きぬけた。
その風と共に少女の声が聞こえてきた。
「ヒドいよねぇ。ボクのたぁいせつな下部(しもべ)をボコボコにしてくれちゃってさぁ？」
その声に、燐と上総が振り向く。
そこには、セーラー服の上から黒マントを羽織った少女が笑顔で佇(たたず)んでいた。
暗闇の中、月明かりに照らされて浮かんだ笑顔は、不気味な雰囲気を纏っている。
「何者(なにモン)や、お前」
突然現れた新手に、上総がいつもの笑顔を消して尋ねる。
「アレ？知らない？まぁ、いいや。近いうちに解ると思うし・・・・」
少女はわざと含みのある言い方で答える。

二人がますます警戒する中、少女は笑顔で話を続ける。
＞i２５６０２―１６５６＜
「ボクの名前は成瀬（なるせ）　結有（ゆう）。今日は偵察に来ただけだったんだけど、これは見過ごせないよね」
どうやら少女は、二人に自分の影達（しもべ）を倒されたのが気に喰わないらしい。
さっきまでの笑顔は、不服そうな表情に変わっている。
「どう落とし前つけてくれるの？」
言ってから、少し間を空（あ）けて、何か思いついたような素振りをする。
「・・・・あっ、そうだ――――――――・・」
そう呟いた刹那、結有が一瞬で燐との距離を詰める。
一瞬の沈黙の中に結有の言葉が響き渡る。
「キミが死んでくれればいいよ」
その瞬間、結有の足元から出てきた数本の鋭い影が刃（やいば）となって、燐に襲い掛かる。
「――――ッ！？」
燐は、当たる寸手（すんで）のところで咄嗟（とっさ）にかわすと、数歩後ろに跳び退（すさ）る。
しかし、すぐに間合いを詰め、反撃の隙を与えない。
燐は結有の攻撃を防ぐので精一杯のようだ。
「燐！！」
燐が劣勢に追い込まれている様子を見て、上総も応戦するが、こちらの攻撃は簡単に防がれてしまう。
「・・・・弱い」
一言そう呟くと、結有は急に攻撃の手を止め、後ろに退いた。
「弱いよ。“神殺し”の能力者だって聞いたから期待してたけど・・・」
結有の言葉に、燐の表情が曇る。
「そんなんじゃあ、新しく手に入れたアレも護れないよ」
「・・・・っ！」
燐の様子を見て、結有は楽しそうに笑う。

「・・・・じゃ、ボクはそろそろ帰るよ。良い暇潰しになったしね」
最後にニコリと笑い、背を向ける。が、
「あ、そうそう・・・」
と、再び燐達の方に向き直る。
「次に会うときは本気で潰しにかかるから、それまでに少しは強くなっててね。・・・って、支部長サンにも伝えといて」
そう言い残し、結有は夜の暗闇の中に消えていった。
「あ！おいっ・・・・」
「止(よ)せ。無駄だ」
上総が後を追おうとするのを、燐が少し離れた所から止める。
「なんやったんや？アイツ・・・」
上総が結有の消えていった方を見つめながら呟いた。
「とりあえず、支部長(アホ)に報告しとった方がええな」
上総がいつもの笑顔を燐の向けて尋ねる。
「そうだな・・・・」
燐はいつもと同じように答えるが、どこか心此処(ここ)にあらずのようだ。
先程の戦闘で火照った身体(からだ)に、春のまだ冷たい夜風が吹き抜ける。
燐が静かに夜空を見上げると、結有に言われた言葉が脳裏に甦(よみがえ)る。

――――――――『そんなんじゃあ、新しく手に入れたアレも護れないよ――――――・・・』

燐にとっては、どんな言葉よりも重い一言だった。
「・・・・また、オレは・・・。・・・・・チッ」
小さな声で呟いたその言葉は、夜の闇の中に吸い込まれていった。
燐は夜空から視線を落とすと、上総の元に歩いていった。

ＥＮＤ

第参話　ｒｅａｓｏｎ―理由―（後書き）

――予告――

遂に、二つの勢力の
　　戦いの火蓋が切って落とされる！！
「上等じゃねぇか。そのケンカ、のってやるぜ」
　明かされる正体・・・
「改めて。ようこそ！我が組織年代記（クロニクル）へ！！」

そして、瑠萎の覚悟とは・・・
「本当に良かったのか？」
「もう・・・決めたことだから」
本当の意味を見つけ出した時、
　　真の意志が試される――――――

第四話　chronicle―年代記―（前書き）

彼らは進む。
　間違った旅路の果てに
　　正しさを祈りながら――――

第四話　chronicle―年代記―

＞i25590―1656＜

―東京都内某所―

多くの人々が活動を始める時間。

播磨（はりま）　瑠菱（るい）も目覚ましの音で目を覚ました。

窓の外で囀（さえず）る雀の声が心地良い。

瑠菱は学校へ行くための身支度をしながら、昨晩の夢について考える。

――昨日の夢は何だったんだろう？

出会ったばかりの二人の――――――しかも、現在の姿でない姿で――

――――夢を見るなど、流石にありえない。

――私だけで考えてても答えは出そうにないし・・・、とりあえず

今日、燐（アイツ）に聞いてみるかな・・・？

そんな事を考えながら身支度を済ませ、家を出た。すると――――

「よォ。迎えに来たで」

――え・・・？

「先・・・輩？と、燐・・・？」

「ついでみたいに言うなよ」

家の前には当たり前のように、笑顔の上総と無表情の燐が立っていた。

「・・・・な、・・・・な」

瑠菱は、何か言いたそうに口をパクパクとさせている。

「ん？どしたんや？」

一方、上総は平然とした表情で笑っている。

――な・・・・、なんでいるのォォォオ！？

瑠菱は心の中で叫ぶと、口に出す。

「ちょっ、なんでいるんですか！？いつのまに家の場所を・・・」

瑠菱は少し大きな声になってしまいながらも尋ねる。
「何でって・・・、なぁ？」
上総が笑顔で燐に振る。
「この間、お前を送っていったじゃねぇか」
燐は相変わらずの無表情で答える。
「一回じゃん！それだけで覚えたの！？」
「・・・？当たり前だろ？」
燐は平然と答えるが瑠菱は苦笑いになる。
――常人じゃないよ・・・
「まっ、もし燐が覚えとらんでも、こっちは政府直属の組織なんやから、国民一人の住所調べるくらい朝メシ前や」
上総はどこか誇らしげに笑う。
「それって・・・犯罪じゃ・・・」
そう呟いた瑠菱の言葉に燐が答える。
「オレ達は法律に囚われない。そういうルールだ」
いつもの無表情で淡々と話す燐。
――え？それって・・・
――人を殺しても罪にならないってこと・・・？
瑠菱はそんな事を考えて、少しの嫌悪感を抱いていた。
「てか、そろそろ学校行かんと遅刻するんとちゃう？」
「あ！そうだった！」
上総のもっともな意見に、時間が遅いことに気付いた瑠菱だった。

なんとか遅刻せずに学校に着くことができた瑠菱達は、学年が違う上総と別れると、教室へと向かう廊下を燐と共に歩いているところだった。
そこで、瑠菱は昨晩見た夢について切り出してみることにした。
「・・・ねぇ、ちょっと」
「？・・何だ」

瑠菱の呼びかけに、燐は振り向かずに答える。
「あのね・・・昨日、変な夢を見たんだけど・・・・」
「変な夢？」
燐は、たいして興味もなさそうに聞き返す。
「それが・・・」
瑠菱が言葉の続きを吐き出そうとしたが――――
ＨＲ（ホームルーム）開始のチャイムが鳴り響いた。
「あっ、ヤバッ！遅刻しちゃう！」
「もうしてるだろ」
慌てる瑠菱を、燐が冷めた声であしらう。
「そこっ！うるさい」
瑠菱は言い返すと、燐を半ば引きずるような形で、教室に向かっていった。

◇

―放課後―
部活が終わる頃には、外はもうほとんど暗くなっていた。
瑠菱は帰り支度を済ませると、学校を出た。
すると、門の所に見知った人影を見つける。
「あれ？まだいたの？燐」
瑠菱は疑問をそのまま口にする。
「当たり前だろ。護衛の仕事なんだから」
「あ・・・。そっか」
燐の言葉で、高校に通う普通の学生という“日常”から、異能力者集団に引き入れられたという“非日常”へと引き戻される。
現在（いま）はその“非日常”が日常になりつつあるのだ。
「先輩が部活に来なかったから、てっきり“仕事”とやらに行ったのかと・・・」
「上総は支部長に呼び出されたんだと」

そんな他愛もない話をしながら二人は帰路についた。

「今日も“仕事”行くの？」

“仕事”の内容を具体的に知らない瑠菱は、軽い気持ちで尋ねる。

「ああ。お前を家に送った後でな」

――まぁ、家に帰れるってだけでも良い方だよね

「てっきり軟禁でもされるのかと思ってた」

瑠菱が、ほっとしたように呟く。

「してほしかったのか？」

「んなわけないでしょ！」

燐の言葉に、ムスッとした表情でそっぽを向く。

「でも・・・、そうされる日も近いかもな」

燐が、茜色に染まる空を見上げて呟いた。

その言葉に、瑠菱が訝(いぶか)しげに首を傾げると、燐が再び言葉を紡ぐ。

「今はまだ心配しなくても良い。お前にはできるだけ・・・深く関わってほしくないから・・・・」

「え・・・？」

燐には珍しく感情の籠(こ)もった声だった。

だが、瑠菱には最後の方は聞こえなかったらしい。

「あっ！そういえば・・・」

「？」

急に瑠菱が声を挙げ、燐の方を向く。

「あのさ、今日の朝した夢の話の続きなんだけど・・・、覚えてる？」

瑠菱は、今朝(けさ)聞こうとして中断されてしまった話の続きを思い出したようだ。

「ああ。昨晩見たっていう・・・」

「そうそう」

興味なさそうに聞いていた燐が覚えていたことに瑠菱は少々驚きな

がら、話そうと内容を思い出す。
「あの・・・、内容を話す前に聞いておきたいんだけど、私達って昔、会ったことないよね？」
「・・・・当たり前だろ」
少し間が空いたが、無表情を崩さずに答える燐。
「だよね・・・」
へへっと笑いながら、瑠菱は内容を話し始める。
「で、夢の内容なんだけど・・・、幼い頃の私と燐が話してたの」
「・・・っ！？」
その言葉を聞いて、燐は目を見開く。
しかし、瑠菱は気付かずに話を続ける。
「ハッキリとは見えなかったんだけど、あんまりに似てたから」
一旦区切って、思案するような仕草をしながら話を続ける。
「けっこう親しげに話してたし、夢は記憶の整理だって言うから、ちょっと気になってさ・・・」
そこまで言うと、瑠菱は肩をすくめて笑ってみせた。
すると、そんな瑠菱の頭にポンと手が乗せられる。瑠菱は驚いて歩みを止めた。
それは、いつも無表情で冷たい目をしている燐からは想像できない程、優しく暖かい手つきだった。
「思い出さなくていい」
「え？」
小さくそう呟いた燐からは悲しそうな感じがした。眼差しは憂いを帯びた色で、どこか遠くを見つめている。
「燐・・・」
瑠菱が名前を呼ぶと、「なんでもない」と言って、瑠菱の頭から手を離して歩き始めた。
「・・・・ヘンな奴」
小さな声で呟くと、燐の後を追って歩き始めた。

◇

―昨夜　深夜二時　東京都　中央支部―

「黒マントの異能力者ねぇ」

悠幹の声が、夜も深まった支部長室に響く。

黒マントの異能力者――――成瀬（なるせ）　結有（ゆう）――――の襲撃を受けた後、中央支部支部長の神尊（こうそ）　悠幹（ゆうき）に報告をしに来たのだった。

「遂（つい）に本格的に動き出しましたか」

悠幹の側近である御守（みもり）護が清楚（せいそ）な口ぶりで話す。

「ああ。俺達と対（つい）になる存在・・・。もう一つの異能力者集団“新たな記録者（リコード）”」

“新たな記録者（リコード）”は、数年前から燐達のいる組織と冷戦状態にある組織だ。

互いに警戒してはいるようだが、どちらも無駄な争いや犠牲は避けたい模様で、これまでずっと冷戦状態が続いていたのだった。

そして今回、播磨　瑠菱を狙っているという組織でもあった。

「その成瀬とやらが言った言葉は俺達への宣戦布告ととっていいんだよな」

悠幹は、どこか楽しそうだ。

「あまり先走らないでくださいよ・・・」

護が溜め息混じりに呟く。

悠幹は、そんな護の言葉など耳に入れてもいないという調子で話し続ける。

「上等だぜ、そのケンカ乗ってやるよ」

そう言い放って、楽しそうな笑みを浮かべる。

「そう簡単にはいかへんと思うけどなぁ」

上総がいつもの調子で呟く。

「政府（うえ）も何か理由があって冷戦状態にしとったんとちゃう？それがそう簡単に戦争に持ち込まれるんか？」

「む。それもそうだな・・・」

上総に尤(もっと)もな事を言われ、言葉に詰まる悠幹。
「こっちの組織の偉い奴が、あっちに殺(や)られたりとかすれば、どうにかなるかもしれんな。お前とか」
と、言って悠幹を指差す上総。
「ちょっ、そこ俺じゃなくても良くね！？」
上総が遠まわしに『死ね』と言っていることを理解した悠幹は慌ててツッコむ。
「でも、偉いんやろ？」
「そ、そりゃそうだけど・・・」
上総に言い寄られ、いつもは俺様の悠幹も渋々答える。
「じゃ、決まりってことで」
「なんでだよっ！絶対(ぜってー)イヤだからな！！」
放っておくと、いつまでも続きそうだと判断した護が、二人の間に割って入る。
「はいはい、お子達。お遊びはその辺にしてお仕事しましょうね」
手をパンパンと叩くと、窘(たしな)めるような口調で言う。
「と言っても今日はもう遅いので、これで解散にしましょう。ご報告ありがとうございました」
そう言って、護は軽く頭を下げる。
「お前ら油断すんなよ。いつ仕掛けてくるか分かンねェんだから」
悠幹が最後に念を押す。
「へいへい」
上総は軽い調子で答えると、手をヒラヒラと振って部屋から出て行った。
燐も後に続いて部屋から出て行こうとするが、悠幹が呼び止めた。
「そうそう。白銀、あっちは多分お前のことも狙ってるから、せいぜい気を付けろよ」
「・・・・ああ、分かってる」
燐は背を向けたまま静かに答えると、部屋を出て行った。

◇

―東京都　午後七時―

瑠菱を家まで送り届けた後、燐は人気の少ない路地裏に来ていた。

懐から鳴り響く携帯を耳に当てると、冷めた声で話し始めた。

「・・・・何だ」

電話の相手の声を聞いた瞬間、燐の顔が強張る。

「・・・ああ、分かった。すぐ行く」

燐は電話を切ると、すぐにどこかに向かって歩き始めた。

しかし、その後をつける人影が一つ。

――今日は、アイツの“仕事”とやらをつきとめて、情報を得よう・・・

その人影――――瑠菱は、燐と別れた後、こっそりと後をつけていたのだった。

――それにしても・・・電話の相手は誰なんだろう？

――燐が難しい表情してたから、親しい人ではないだろうなぁ

そんな事を考えながら、一定の距離を保って尾行する。

――一体どこに向かっているんだろ？

燐はできるだけ人気の少ない道を選んで歩いている。

すると、急に歩調を速め、角に曲がった。

――あ、しまった！

瑠菱も慌てて後を追って角を曲がる。

その瞬間――銀色に輝く刀の切っ先が瑠菱の目の前に突きつけられた。

「・・・・っ！？」

瑠菱は咄嗟に歩を止める。頬に冷や汗が流れる。

「・・・何だ、お前か」

刀を向けていた燐は、警戒心を解くと刀を下げる。

「・・・・な、なんで」

気付いたの、と言う前に燐が口を開く。

「気付いてないとでも思ったのか？」
燐が冷めた声で問いかける。
「・・・うん」
瑠菱が俯いて頷くと、燐が溜め息混じりに言葉を紡ぐ。
「あのなぁ、お前は命狙われている身なんだぞ。もしもの事があったらどうする気だ」
「・・・・ごめんなさい」
瑠菱がしゅんとして謝ると、燐はもう一度溜め息をついた。
「分かったなら、いい。・・・とりあえず、お前をこのままオレと一緒に同行させるわけにはいかない」
そう言って、歩き出そうとした燐を立ち止まらせる声が聞こえてきた。
「おやおや、二人ともお揃いとは！これは都合がいい」
声のした方を二人が振り向くと、高級そうな黒い車の中から四十代ほどの男性が出てきた。
人当たりの良さそうな笑顔で、燐達の方に近寄ってくる。
その男性の周りには、屈強そうなボディガードらしき男達が六人ほど付いている。
近づいてくる男性を見て、燐は顔を顰(しか)める。
――偉い人？・・・・もしかして、総理大臣！？
テレビや新聞で見たことのある顔に、驚きを隠せない瑠菱。
「だ、誰ですか・・・？」
瑠菱が小さな声で尋ねると、男性は笑顔を浮かべて答えを返す。
「どうも。播磨君、といったかな？総理大臣をやらせてもらっている者だよ」
「そ、総理大臣！？さん・・・、なんで私の名前・・・・」
総理大臣と名乗る男性に質問を重ねる瑠菱。
「そりゃあ、国のトップだからね。それに君みたいな“特別”な存在の名前くらい知っておかなくちゃ」
言って、男性はニッコリと微笑む。

「“特別”？」
その言葉に、瑠菱は首を傾げる。
「ああ。ちなみに、そこにいる白銀君達の組織を指揮している一人でもある」
男性は穏やかに言葉を紡ぐ。
「そして、もう会っただろう？悠幹の父親でもあるんだよ。本名は、神尊　幹也という」
幹也の口から語られる事実に驚く瑠菱。
そんな瑠菱の様子を見て、苦笑いしながら幹也が近寄る。
「少し驚かせてしまったかな？まぁ、これから長い付き合いになるんだ。よろしく頼むよ」
そう言って、幹也は瑠菱の手を握ろうと手を伸ばす。
すると、燐が先に瑠菱の手を引いて、庇うように一歩前に出た。
「瑠菱に近付くな」
そう言い放った燐は警戒心に満ちた目で、幹也を睨み付けている。
「おやおや、随分と嫌われているみたいだね。それとも――――――・・」
幹也の言葉を遮るように、燐が口を開く。
「無駄話をしているヒマがあるなら、さっさと用件を言え。お前が用があるのはオレだろう」
燐の言葉に、幹也はやれやれといった調子で話す。
「そう焦らずとも何もしないさ。そんなに彼女が心配かい？」
「・・・黙れ」
燐が小さな声で呟く。その様子を見て、幹也が面白そうに笑った。
「本当に単純だね、君は。まだ、あの人のことを悔やんでいるのかい？」
「黙れって言ってるだろ！！」
燐には珍しい大声に、瑠菱は一瞬ビクッと肩を震わせた。
「燐・・・」
珍しく感情を露にしている燐の姿に、思わず声が漏れる瑠菱。

その声に気付いたのか、燐はいつもの無表情に戻る。
「はは。すまないね。では、仕事の話をしようか」
謝って話を切り替えようとする幹也。反省の色は全くない様子。
「・・・おい」
「？」
燐が瑠菱の方を振り向いて声をかける。
その声は既に、いつもの無感情な声音だ。
「お前は話が聞こえない程度に離れとけ」
「え？なんで・・・」
理由を聞こうとした瑠菱を幹也の言葉が遮る。
「まぁ、いいじゃないか。聞かれてマズいことでもあるのかい？」
何か裏がありそうな笑顔で、燐に尋ねる。
「てめぇ・・・・」
幹也の言葉に、再び睨み返す燐。
しかし、幹也は無視して話し始めた。
「・・・といっても、大した事ではない。“新たな記録者（リコード）”と戦争をしてもらいたい」
何でもないように淡々と話す幹也の言葉に、目を見開く燐。
「大した事ないだろう？」
「どういうつもりだ。悠幹には言っているのか」
燐は冷静を装っているが、どことなくイライラしているようだ。
「言ってない。言えば全力で反論されそうだったからねぇ。だから、君に直接依頼しに来たのさ」
昨晩の悠幹の言動を知ってか知らずか、困ったように笑う幹也。
「そこで君には、先行して戦争の火蓋を切って欲しいんだ」
「なるほどな・・・」
燐が静かな声で言葉を紡いでいく。
「オレ達に汚れ仕事押し付けて、戦争させて、お前らはのうのうとそれを見物か」
静かな声音の中には怒りが隠れている。

「それが、君達の“仕事”だろう？」
幹也は当たり前のように笑う。
「この仕事は今後の政治を円滑に進めるために必要な事だよ？今の内に、私達の邪魔になるモノは排除しておかないと。君に断る権利はない」
淡々と話す幹也。その言葉は、燐達（かれら）を道具としか思っていないような冷たい口調で紡がれる。
それに、燐も無表情で答える。
「あぁ、解ってる。それに断る気もない」
燐の答えを聞いて、幹也は見下すように笑いながら言う。
「断れないの間違いだろう？」
「今日は随分と口が回るようだな」
燐は、幹也を睨みつけて言う。
しかし、幹也はその言葉を無視して話を切り替える。
「まぁ、難しい仕事ではないだろう。こちらには、播磨君という“切り札”があるのだから」
満足そうに言って、瑠菱に視線を送る。
―え？“切り札”って、どういう意味？
―私が保護された本当の意味って・・・・
幹也の言葉に絶句する瑠菱。
瑠菱の心の中を読んだように、幹也は言葉を紡ぐ。
「君が、私達の組織“クロニクル”に保護された理由（わけ）が解っていないようだね。君が、“リコード”を潰すための唯一の対抗策――――――」
「余計な事言うなって言っただろ！」
燐が、幹也の言葉を遮って声をあげる。
しかし、またもや燐の言葉を無視して話しを続ける幹也。
「相手も異能力を使うんだ。それを打ち消せるのは播磨君だけ。そして、哀れな咎人の白銀（かれら）君達を救うことができるのも君だけだ」
幹也は、話の相手を燐から瑠菱に変えて話し続ける。

「君はどうする？このまま彼等に護られているだけで終わるのかい？」
幹也はどこか楽しそうな表情である。
「私は・・・・」
瑠菱が言葉に詰まっていると、燐が腕を引いた。
「考えなくていい。お前は今のまま普通に暮らしていればいいんだ」
「・・・え」
燐は力強い瞳で真っ直ぐに瑠菱を見据えて言った。
そして、幹也の方に振り返って一言、
「オレは帰る」
と言うと、そのまま瑠菱の腕を引いて去っていった。
静かになった路地裏で、燐達が去っていった方を眺めながら幹也が呟く。
「本当に単純で面白いな、彼をからかうのは」
幹也は満足そうに嗤う。
そこへ、護衛の一人が幹也に近付いて耳打ちをする。
「神尊様、そろそろお時間です」
「ああ、わかった」
軽く返答して車に向かう。
「さぁ、これからどう転ぶか・・・。楽しい宴（うたげ）の始まりだ」
小さな声で楽しそうに呟くと、幹也は車に乗り込んだ。

◇

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0983n/

FIND　OUT

2011年10月7日14時29分発行